訶梨帝母像
Hārītī
田代有樹女

訶梨に魅せられたのは幼少の頃から。実家の中桜桜の木は、毎年枝をたわわに美しい実をつける。その何と神秘的なこと。
桜桜も人物も描きたい大好きなモチーフ。何気なく組み合わせて人間の多面性などを表現してみたくなり、描き続けて20数年が過ぎた。途中で気が付いた時、人物像は訶梨帝母像になっていた。言うまでもなく、無意識且つ全く偶然のことであった。

やがて訶梨帝母を詳しく調べていくと、深く計り知れない東洋思想が見えてきた。そしてそれは私の心を仏教美術へと導いていった。

桜桜は「吉祥葉」となり、人物は「訶梨帝母像」となった。大きな力に生かされていると感じた時、ふと寄り道して「献花」を描いてみた。今、自分自身の訶梨帝母像を模索して、終着のない道程をゆっくりと歩いている。
